

# 「文献学的アクセント」を考える<sup>1</sup>

—プロヴァンス語の音響分析を通して—

城 生 佰 太 郎

## Research on Philological Accent

JÔO Hakutarô

### 【キーワード】

文献学的アクセント、プロヴァンス語、実験音声学

The author succeeded in getting a new idea about the classification of the accent by analyzing the Provence (one of the French dialects) sound, in the way having to do with acoustic phonetics. That is, it is to appeal for the philological accent, in addition to the traditional phonological accent, and the phonetical accent.

Also, as the by-product, so far, as for both, it pointed out a sometimes continuous segmental sound and the prosody.

Incidentally, it means < signe diacritique > of < accent aigu, accent grave, accent circonflexe, tréma, cédille > and so on, which is used in French as the specific example which is related to the philological accent, which was described above and the unique notation which was used from the old days by the historical linguistics and so on.

---

<sup>1</sup> 本稿は、2012年度日本実験言語学会(文教大学にて開催)第5回大会における口頭発表内容の一部を文字化したものである。

## 1. 序論

### 1.1 プロヴァンス語を分析する意義

中世フランス語におけるoui(英語のyesにあたる)の発音の違いによって、北方の方言をオイル語langue d'oil、南方の方言をオック語langue d'ocと呼ぶが、プロヴァンス語は後者に属す。しかしながら、*Lou prouvençau à l'escolo*(1952)の著者の一人であるカミュー・ドゥールガン(C. Douguin)は、以下のように力説している<sup>2</sup>。

La langue provençale est belle et encore vivante. Ce n'est pas un patois mais une langue.(プロヴァンス語は美しい。しかも、まだ死語ではない。さらに、俚語<sup>りげん</sup>などではなく、れっきとした言語である。)

すなわち、中世においては文化の中心地として栄華を極め、十字軍によってもたらされた潤沢な財源を背景に、宮廷の加護のもと吟遊詩人troubadourがラテン語のかわりに用いた言語が、当時の日常語であったプロヴァンス語であった。このことから、まだ一介のマイナーな地域方言でしかなかった現在のパリを代表とする北方方言に対し、当時のプロヴァンス語を含めた南方方言の勢力がいかに絶大であったかが窺知されよう。

しかし、その後の栄枯盛衰によって、現在のプロヴァンス語は絶滅に瀕した状態にあるといっても過言ではなかろう<sup>3</sup>。そのような状態を目の当りにすると、言語学者というものは絶滅に瀕した言語にことさら強

<sup>2</sup> 同書序文のp 9による。

<sup>3</sup> フランス政府の標準フランス語化政策による。なお、「プロヴァンス語」という呼称は、「フランス語プロヴァンス方言」とするのが正しい。しかし、フランスにおける慣習に従って、本稿では「プロヴァンス語」としておく。

い興味を抱き、なんとかいまのうちに記述・分析を行おうとするものである。本稿を成すにあたっての直接的な動因は、まさにそのようなものであった。ただし、これを企図した時期はかなり前であり、1968年にさかのぼる<sup>4</sup>。

さらに、実験音声学的研究を行う際には、ターゲットとする言語の古さと音質が問題となる。すなわち、余りにも古すぎると音声データが残されていない。また、さほど古くなくても先行研究における録音技術が低いと、いくら最新鋭の機材を用いても音響音声学的研究には使えない。この点で、プロヴァンス語はいろいろな意味で好条件を備えていたということが、ことさらこの言語を取り上げたもうひとつの理由である。

## 1.2 本稿の目的と「アクセント」の多義性

いまさらここに改めて指摘するまでもないことだが、文献に記録された記号類は音韻記号とも異なるし、もちろん音声記号とも異なる。従って、本来は研究目的に応じて、文献上に記録された記号類をしかるべき方法を踏まえて音韻記号や音声記号に変換しなければならないはずのものである。しかしながら、筆者の見るところでは、文献による音声言語研究では、必ずしもそのような対応づけが行き届いているとは言い難いのが現状である。

そこで、本稿では文献で扱われているプロヴァンス語のアクセント記号を中核に据えて、これと密接な関連を持つ母音記号をも視野に収めたターゲットを音響音声学的方法によって分析し、文献上で扱われている記号類と音声記号との対応づけを明確にすることを目的とする。

---

<sup>4</sup> 当時、筆者はたまたまフランス旅行をしていて、偶然アヴィニオンでプロヴァンス語復興運動のリーダーであったルイ・グロス氏と出会ったことがきっかけで、この言語に興味を持つようになった。しかし、私の専門がモンゴル語学と実験音声学であったため、その後永らく音声データを死蔵したままで今日に至ってしまった。

なお、本稿の中核となるアクセントという術語に関しても、上に指摘した視点から改めて整理しておく、以下に述べる3種類に別れることになる。

第1は、音声学的アクセントである。1回ごとの具体的な音声学的実現形を根拠として、調音的・音響的・聴覚的に具現化された音声の量的変化を定量的に分析して、それぞれの特徴を記述することを目的とする音声学の研究方法にのっとったアクセント観である。なお、定義をはじめとする詳細は、紙数の関係から城生佰太郎(2008: 127-165)などに譲る。

第2は、音韻論的アクセントである。現代言語学では、「アクセント」といえば多くの場合、暗黙裡にこの「音韻論的アクセント」をさすことが多いと思われるが、示差的機能によって類別された音の量的パターンを指す。従って、示差的対立を持たないアクセント現象に対しては「音韻論的に無意味」であるとして、記述の対象から除外することもしばしばある。

第3は、本稿で新に提唱する「文献学的アクセント」または、「正書法的アクセント」である。すなわち、伝統的な調音音声学的観察結果や古くからのしきたりとして継承されてきた独特の約束事としての表記法によって記録されたアクセントの類をさす。このような、歴史言語学や文献言語学に見られるアクセント表記は必ずしも音韻論的であるとは限らないし、音声学的であるとも限らない。さらに、その表記の中には積年にわたる一種独特の慣用によるところも決して珍しくない。

## 2. 方法論

### 2.1 分析資料

プロヴァンス語関連の先行研究は、文学の分野ではテオドール・オーバネルThéodore Aubanelを中核として数多く発表されているが、音声

学的研究は管見の及ぶ範囲ではCoustenoble(1945)を除いて見当たらない<sup>5</sup>。ただし、この研究も伝統的な調音音声学に基づくものであり、スペクトログラムなどを用いた音響音声学的方法による実験音声学的研究は、現在までのところ未見である。

そこで、本稿では筆者が1968年7月から8月にかけて訪問した南仏アヴィニョンにて入手したLPレコードによる録音資料Dourguin(1964: *Lou provençau à l'Escolo: initiation à la lecture du provençal*)を用いて、ここに収録された音声をデジタル処理してwave形式のファイルに変換し、分析した。テキストの発話者は、マリ=テレーズ・アイメスMarie-Thérèse Aymès氏とルイ・フェロLouis Féraud氏である。なお、このうちから分析対象とするものは、アクセント現象とこれを担っている母音に限定する。

上記先行研究Coustenoble(1945)およびDourguin(1964)によれば、プロヴァンス語のアクセントは、強さアクセント(l'accent tonique)に属し、語の最終音節または次末音節に第1強勢がくるとされている。ただし、ここで言われている「アクセント」は、筆者の術語による「文献学的アクセント」ないしは「正書法的アクセント」のことであり<sup>6</sup>、母音字の上に左下向きの記号を付した<é><sup>7</sup>、右下向きの記号を付した<è>などをはじめとする文字言語によって表記される表記体系のことをさす。

また、これらアクセント記号を含めた母音の総数は、<a>,<i>,<u>,<e>,<o>,<é>,<è>,<ó>,<ò>,<à>の10種を数える。なお、最終音節に第1強勢がくる条件は、

---

<sup>5</sup> 無論、実用語学書ならば何点かはある。

<sup>6</sup> 以下、本稿では特に断らない限り単に「アクセント」という場合は、このレベルのアクセントを意味する。

<sup>7</sup> なお、本稿では文字素を< >で示す。

- 1) <a> , <i> , <u> , <é> , <è> , <ò>で終わること
- 2) 語末の<e>または<o>が、1個の子音を従えて終わること

であり、次末音節に第1強勢がくる条件は、

- 3) <e> , <o>で終わること
- 4) 最終音節が<i>であり、直前の音節に<é> , <è> , <ó> , <ò> , <à>がくること

とされている。

従って、本研究の全体の方向性としては、

- (1) 分節音のレベルで、上に述べた文字表記上で区別されている<a> , <i> , <u> , <e> , <o> , <é> , <è> , <ó> , <ò> , <à>の10種の母音に関する音声学的実態を、音響音声学的観点から定量的に検討する。
- (2) プロソディーのレベルで、「第1強勢」を担うとされている母音とそれ以外の母音とで、実際にどの程度の音声学的差異があるのかをピッチ、時間長、音質、インテンシティの4方向から検討する。あわせて、文献上でいわれているアクセントの実態を、音声学的レベルから明らかにする。
- (3) 以上の結果を踏まえて、現時点における妥当な国際音声記号表記を試みる。また、その結果に基づく提言を行う。

という流れになる。

## 2.2 分析装置および手順

上に述べたように、wave形式でファイル化した音声資料を、KAY社製Multi-Speech Model 3700, Ver2.7.0を用いてパソコン上で分析した。標本化は44,100Hz、量子化は16ビットのモノラル、PCのOSはWin 7である。なお、フォルマントの算出は、Multi-Speech搭載のLPC、FFTおよびSPG(spectrogram)との摺りあわせによっている<sup>8</sup>。

次に、分析に用いた語彙はすべて前述のDourguin(1964)に基づき収録されたディスク*Lou provençau à l'Escolo : initiation à la lecture du provençal*によっている。すでに製品化されている音源なので、被験者数やサンプル数、それに音種の偏り等に不満はあるが、これに代わる音源資料はないのでとりあえずはこの音源を用いた分析を行なった。表2-1に、資料の全体を示しておく。

表中、下線付きの太字で示してある部分が、いわゆるアクセントになっているとされる部分である。なお、最近の実験音声学的研究では、限られた資料を通して背後に控えている一般性の高い傾向性を明らかにすることに多くの研究者の関心が集まっている。しかし、言語学における理論言語学と記述言語学との棲み分けと同様に、音声学においても一般性の高い現象を追求するという方向性だけでなく、ケース・スタディーとして限られたデータと愚直なままでに対峙するという記述研究がある。本稿における基本姿勢が後者にあることは、これまでの脈絡から考え合わせれば至極当然のことであろう。

---

<sup>8</sup> なお、本稿で用いた装置では、LPC解析による誤差が散見されるため、結果としてSPGとFFTとのすり合わせによる方法を優先した。

表 2－1 分析資料

(a-1) 強母音：最終音節

<a> : chima, juja, marcha, degenera, acheta, carregaa, maneja, amusaa,  
galeja  
<i> : gemi, agi, gari, reveni  
<u> : banaru, galaguu, aguu  
<é> : menusié, devé, jardinié  
<è> : davalè, s'amusè, achetè  
<ò> : acrò, ecò  
<e,o>+子音 : Pascalet, muguet, gigot, Margott, eros

(a-2) 強母音：次末音節

<o>の前 : chato, caraco, sacocho  
<e>の前 : pese, alume, vilage  
<i>の直前に置かれた<é>,<è>,<ó>,<ò>,<à> : éli, bèsti, tóuti,  
pòri, pròchi, noutàri, gàbi, secretàri

(b) 弱母音：

上記のうちで、太字で下線が引かれていないすべての音節の母音。  
具体的には、<a>,<i>,<o>,<e>,<u>によって表記される母音となる。

### 3. 分析結果

#### 3.1 分節音

表2-1の分析資料のうち母音に関する詳細を以下に述べる。

##### 3.1.1 <i>

この母音には、アクセント記号の付されたものがなく、1種類のみである。音響解析に基づく結果は表3-1のとおりであり、それぞれ下線付きの太字で示してある部分のフォルマントが計測されている。なお、上の3例がいわゆる「強勢になったi」であり、残りはすべて「無強勢



表 3-1 <i>

i		
	F <sub>1</sub>	F <sub>2</sub>
agi	315	2480
reveni	300	2500
gari	400	2500
menusi	230	2800
jardini	390	2400
jardini	320	2560
gigot	300	2600
vilage	340	2400
e1li	270	2800
be2sti	380	2200
toluti	230	2400
po2rri	360	2600
pro2chi	280	2800
nouta2ri	280	2210
ga2bi	360	2300
secreta2ri	300	2400

上に示した計測値を、グラフ化したものを図3-1に示す。

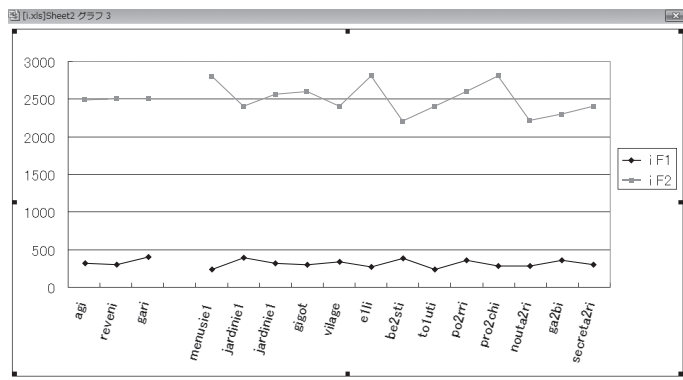


図 3-1 <i>

の i」ということになる<sup>9</sup>。

表および図からも明らかのように、<be2sti, nouta2ri, ga2bi>の最終音節だけは他と比べてやや第2フォルマントの値が低くなっている。これは、直前にアクセントをになって長音化した<be2, ta2, ga2>などがあるために弱化が生じた結果、舌位置が心持ち中舌方向へ移動したためと推測される。

しかしながら、注目すべき点は弱化が生じても英語などのように母音の音質までもが大きく変わるということがないという事実である。また、弱化の程度差にもばらつきがあり、等条件下にありながら、<toluti, po2rri, pro2chi, secreta2ri>ではそのようなことが起こらないということである。

以上の結果を総合すれば、いわゆるアクセントの有無にかかわらず文字レベルの<i>が表す音声は、IPAの [i] に該当すると見るのが穏当なところであろう<sup>10</sup>。ただし、精密表記が必要な場合には後退化補助記号 [.] を添えれば良い。

### 3.1.2 <e>, <é>

<e>には類似音として、他にアクセント記号の付された<è>と<ê>があるが、分析の結果ここでは<e>と<é>をまとめて扱い、<è>については後述する。

音響解析に基づく結果は表3-2および図3-2のとおりであり、それぞれ下線付きの太字で示してある部分のフォルマントが計測されている。な

<sup>9</sup> また、表中に用いられている「e2」は<è>、「o2」は<ô>、「a2」は<â>をそれぞれ示す。音響解析ソフト上の都合によって、特殊文字を受け付けないため便宜的にこのような表記を施してある。以下、表中ではすべてこの表記を用いる。

<sup>10</sup> なお、フォルマント数値とIPA表記との対応関係に関しては城生恒太郎(1997:54-61)などを参照されたい。

お、上の7例が伝統的な表現による「強勢をになった e または é」であり、残りはすべて「無強勢の e」ということになる<sup>11</sup>。

表 3-2 <e, é>

	F <sub>1</sub>	F <sub>2</sub>
Pasca <u>le</u> t	310	2200
mug <u>ue</u> t	350	2200
<u>pe</u> se	350	2100
de <u>ve</u> l	350	2250
menu <u>si</u> el	380	2300
jardin <u>ie</u> l	380	2200
<u>e</u> lli	360	2200
<u>a</u> cheta	400	2100
<u>d</u> egenera	400	2200
de <u>g</u> enera	450	2300
dege <u>n</u> era	390	2200
<u>r</u> eveni	400	2250
re <u>v</u> eni	410	2300
<u>d</u> evel	350	2250
<u>m</u> enusiel	320	2300
<u>a</u> chete2	340	2200
<u>e</u> co2	440	2250
<u>e</u> ros	400	2200
alu <u>m</u> e	390	2200
pe <u>s</u> e	350	2100
vil <u>a</u> ge	390	2050
<u>s</u> ecreta2ri	370	2210
se <u>c</u> reta2ri	370	2200

<sup>11</sup> 表中に用いられている「el」は、<é>を示す。註8に述べたのと同じ理由による。

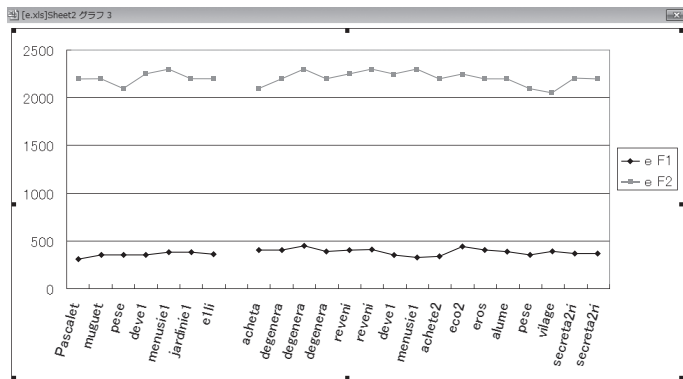


図3-2 <e, é>

これらの結果から見る限りでは、強勢の有無にかかわらずフォルマントの値は第1、第2とも安定しており、いずれもIPAでは [e] に該当すると見て差し支えない。従って、<e>と<é>における表記上の違いは、音響分析結果からは必ずしも明瞭な音質の差として対応づけられなかったということになる。

なお、alume, pese, vilageのように、音声学的に長音化して強いエネルギーを有する音節の直後に位置するme, se, geなどが、英語のように音質までも変えてしまうほどの弱化を被らないという点は、前項で指摘した<i>と同様この言語における弱化母音の特徴である。また、このことは現代フランス語に見られる弱化母音の傾向性とも通底するものと思われるので、後述するプロソディーのところで掘り下げることにする。

### 3.1.3 <è>

音響解析に基づく結果は表3-3のとおりであり、それぞれ下線付きの太字で示してある部分のフォルマントが計測されている。サンプル数こそ4例と少ないが、いずれも安定した数値を示しており、前述の<e>

や<è>に対して相対的に第1フォルマントは高めに、また第2フォルマントは逆に低めに出ている。

以上の結果から、IPAで表記すれば前舌半広母音の [ɛ] とするのが穏当なところであろう。なお、図3-3および、後述するF<sub>1</sub>-F<sub>2</sub>散布図(図3-7)もあわせて参照されたい。

表 3-3 <è>

e2	F <sub>1</sub>	F <sub>2</sub>
davale <u>e</u> 2	510	2100
s'amuse <u>e</u> 2	510	2200
achete <u>e</u> 2	420	2100
be2sti	430	1900

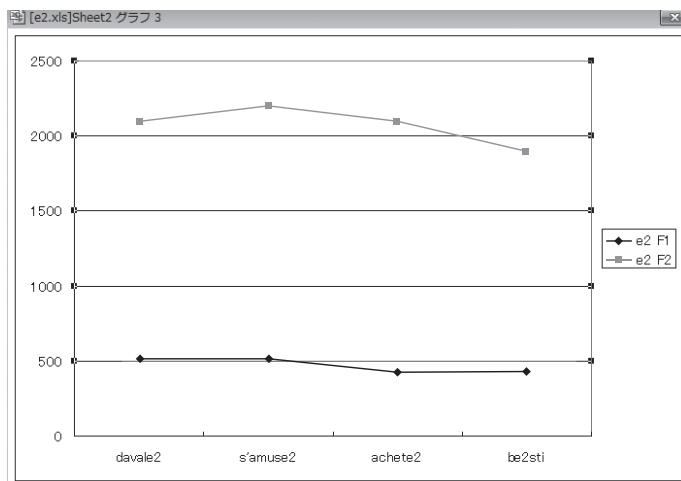


図 3-3 <è>

### 3.1.4 <a>類

<a>には類似音として、他にアクセント記号の付された<à>がある。分析の結果、表3-4および図3-4から明らかなように音声学的に2種類の異なるaを検出したが、それは必ずしもアクセント記号の有無にかかわる<a>と<à>の違いを反映するものでもなければ、強勢をになったaかそうでないaかの違いを反映するものでもなかった。

表3-4 <a>類(1)

	F <sub>1</sub>	F <sub>2</sub>
acheta	800	1600
<u>a</u> cheta	900	1700
<u>a</u> chete2	860	1600
marcha	720	1700
<u>m</u> archa	860	1600
vil <u>a</u> ge	810	1600
<u>a</u> gi	800	1600
<u>g</u> ari	710	1700
<u>b</u> anaru	780	1660
ba <u>n</u> aru	750	1600
<u>g</u> alagu	700	1700
ga <u>l</u> agu	720	1660
<u>d</u> avale2	850	1600
da <u>v</u> ale2	800	1610
s'amuse <u>l</u>	750	1640
Pasca <u>l</u> et	670	1700
<u>a</u> lume	820	1700
<u>c</u> araco	760	1600
<u>s</u> acocho	760	1650
nouta <u>2</u> ri	840	1650
<u>g</u> a2bi	700	1600
secreta <u>2</u> ri	720	1700

表 3-4 <a>類( 2 )

degener <u>a</u>	860	1360
car <u>a</u> co	900	1340
<u>ch</u> ato	860	1340
<u>a</u> gu	800	1355
<u>i</u> ardinie1	845	1330
<u>a</u> cro	980	1410
<u>P</u> ascalet	790	1330
<u>M</u> argot	890	1350

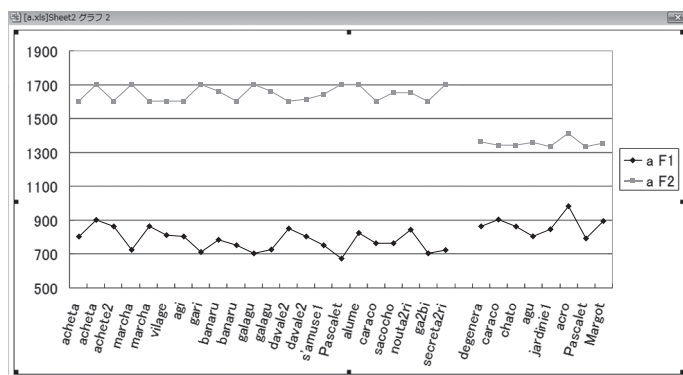


図 3-4 <a>類

図では、左右を境界で仕切るような形で明瞭な音質の差が見て取れる。すなわち、右側のグループでは左側のグループに対して第1フォルマントがやや上昇しており、逆に第2フォルマントが顕著に下降している。このことから、右側は後舌広母音 [ɑ] であるのに対し、左側は前舌広母音 [a] であると見ることができる。ただし、[ɑ] と [a] の間には少なくとも共時的には一定の条件があるわけではなく、いわゆる自由異音の関係にある。なお、後述するF1-F2散布図(図3-7)もあわせて参照されたい。

### 3.1.5 < o 類> と < ou >

<o>には類似音として、他にアクセント記号の付された<ô>と<ò>がある。ここでは、これら3種類のoを総称して<o類>と呼んでおく。分析の結果、今回用いた資料の範囲内では、表3-5および図3-5から明らかなように音声学的に2種類の異なるoを検出したが、それは前項の<a>類で検証したのと同様に、必ずしもアクセント記号の違いや「強勢の有無」を反映するものではなかった。

図では、境界で仕切るような形で4種類のF<sub>1</sub>-F<sub>2</sub>の分布状況が見て取れる。一番右側のグループでは、第1、第2フォルマントとも全体的に上昇しているところから、IPAでは[a]で表記される半広から半狭にかけての弱化した中舌母音であることがわかる。ただし、sacochoの最終音節はいわゆる「綴り字発音」が行われているため、残念ながら自然な弱化ではない。

表3-5 <o類>と<ou>

	F <sub>1</sub>	F <sub>2</sub>
<u>eros</u>	420	750
<u>gigot</u>	400	750
Marg <u>ot</u>	410	710
ac <u>ro2</u>	400	760
ec <u>o2</u>	380	720
<u>toluti</u>	300	760
<u>nouta2ri</u>	340	830
<u>pro2chi</u>	600	1000
<u>po2rri</u>	550	1070
sac <u>ocho</u>	680	1030
saco <u>cho</u>	600	1300
carac <u>o</u>	500	1300
chat <u>o</u>	480	1200



「文献学的アクセント」を考える  
—プロヴァンス語の音響分析を通して—

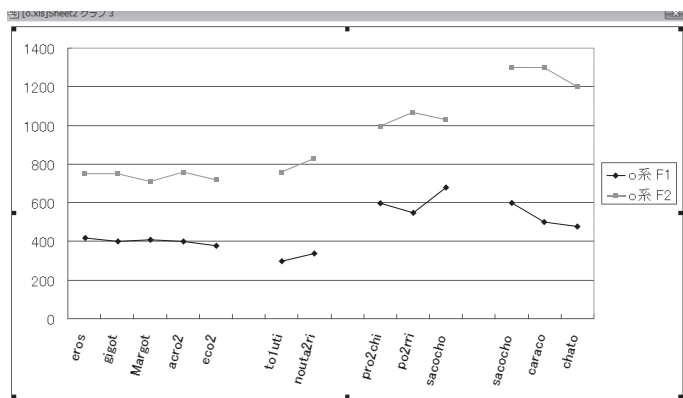


図3-5 <o類>と<ou>

次に、右から2番目のグループをIPAで表記すれば、後舌円唇半広母音の [ɔ] とするのが妥当であろう。ただし、第2フォルマントの値は後舌母音としては幾分高いので、精密表記では前進化補助記号 [.] を併用する必要がある。

ひとつ飛ばして、一番左側はIPAでは [o] で表記される半狭の後舌円唇母音である。ここで気づくことは、これまで見てきたものと違って、綴り字情報によって半広の [ɔ] か半狭の [o] かを見極められるということである。すなわち、次末音節にある<ò>,<o>ならば [ɔ] となり、語末にある<ò>,<o+子音字>ならば [o] となるということである。

最後に、残る<ou>だが、現代フランス語と同様に2文字の組み合わせによって後舌円唇狭母音 [u] を表している。今回分析することができたサンプル数はわずかに2例を数えるのみであったが、アクセントをになった音節のものと、そうでないものとの間に大きな差異はなく、典型的な [u] 母音の特徴をしっかりと出していた。

### 3.1.6 <u>

この文字は、ローマ字読みをして [u] だと早合点してはならない。というのも、表3-6および図3-6から明らかなように、現代フランス語と同じく前舌円唇狭母音 [y] を表しているからにほかならない。

なお、これまでに見てきた<i>,<e>,<a>などと同様に、<u>においても、いわゆる強勢の有無は音声学的レベルにおける音質差とは対応していないことが確認された。

表3-6 <u>

	F <sub>1</sub>	F <sub>2</sub>
agu	320	1700
banaru	260	1800
galagu	330	1900
menusi <sup>1</sup>	260	1900
s'amuse <sup>2</sup>	400	2000
muguet	300	1700
alume	370	1900

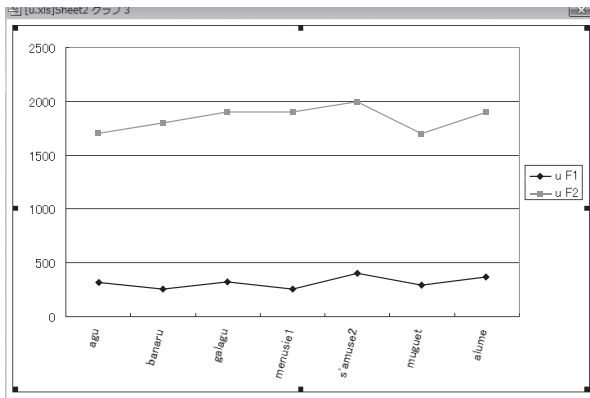


図3-6 <u>

### 3.1.7 総括

以上の総括として、<i>,<e>,<é>,<è>,<a>,<à>,<o>,<ò>,<óu(ou)>,<u>の10種類の文字表記によって表されている音声を、 $F_1$ - $F_2$ 散布図によって図3-7に示す。本文中でも述べたが、それぞれの文字表記に該当するIPAは次のようになる。

<i> = [i]

<e>,<é> = [e]      <è> = [ɛ]

<a>,<à> = [a] または [ɑ]

<o>,<ò> = [o] または [ɔ]。弱化の場合は [ə]

<óu(ou)> = [u]

<u> = [y]

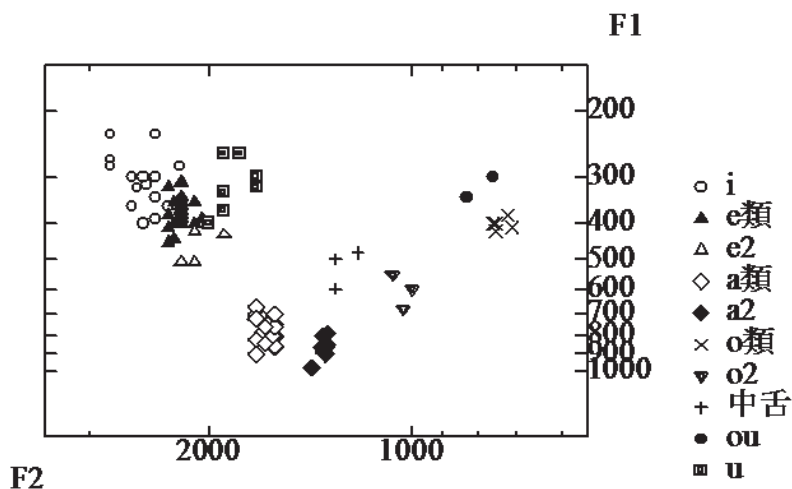


図3-7  $F_1$ - $F_2$ 散布図

## 3.2 プロソディー

表2-1の分析資料のうち、プロソディーに関する詳細を主として、(1)ピッチ、(2)時間長、(3)弱化母音、の3点から以下に述べる。単位は、(1)がヘルツ(Hz)、(2)がミリセカンド(ms)である。ただし論述の順序は、まず(1)と(2)について2音節→3音節→4音節の順に述べてから、最後に全ての語を対象とした(3)について述べる。なお、「ピッチ型」に表示してある [H]、[M]、[L] は、それぞれ音声学的レベルで捉えた高音調、中音調、低音調、の略号である。また、IPAではピッチの動態を [↘] や [/] のように表記することができるが、本稿ではこのような場合に [HL] とか [LH] という表記で対応している。

### 3.2.1 2音節語

2音節語に該当する19語について、ピッチと時間長を計測した結果を表3-7および図3-8、9に示す。ピッチ・パターンではHLのように下降するものが12例もあり、全体の63%を占めている。もとより、この言語には後述するように弱化母音が実在するので、音声類型論的観点から見ても強さアクセントであることは疑う余地もない。しかしながら、ストレスに随伴して音声学的レベルで確認されるピッチに、ある一定の傾向性が見られるという点は興味深い。

表の上段は、伝統的な表現では最終音節にアクセントがあるとされるものであり、下段は次末音節にアクセントがあるとされているものである。

この表で見える限りでは、伝統的なアクセントを示す音声学的な対応物は時間長であるということがわかる。

表3-7 2音節語のピッチと時間長

2音節語	ピッチ(Hz)		ピッチ型	時間長(ms)	
	第1音節	第2音節		第1音節	第2音節
agi	136	196	LH	132	509
gari	128	185	LH	272	385
devel	126	162	LH	210	401
marcha	150	176	LH	419	475
margot	123	193	LH	306	384
acro2	104	153	LH	163	453
gigot	165	120	HL	296	394
muguet	140	108	HL	197	271
eco2	233	126	HL	144	268
eros	204	112	HL	185	238
agu	161	123	HL	202	253
be2sti	227	106	HL	396	111
to2uti	199	128	HL	292	202
po2rri	157	101	HL	325	182
pro2chi	245	152	HL	318	220
ga2bi	181	196	MH	382	204
pese	171	102	HL	349	303
elli	272	184	HL	226	141
chato	124	93	HL	506	223

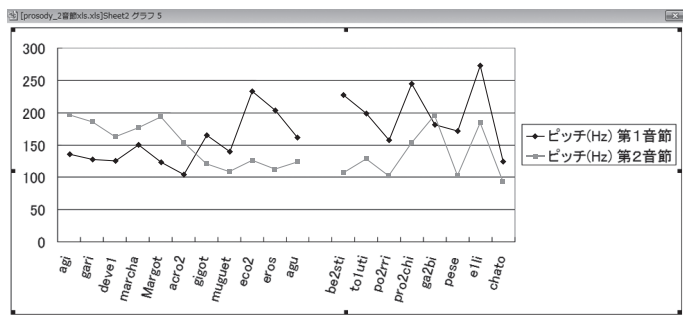


図3-8 2音節語のピッチ

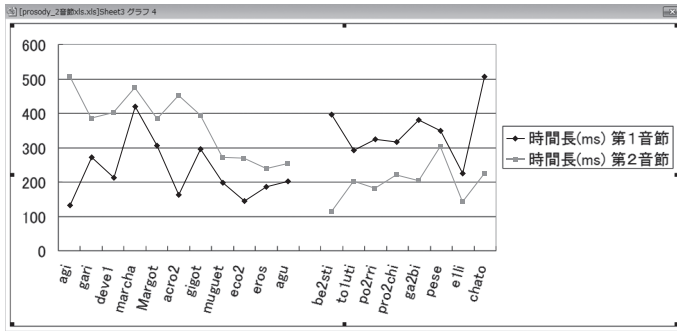


図3-9 2音節語の時間長

### 3.2.2 3音節語

3音節語に該当する17語について、ピッチと時間長を計測した結果を表3-8および図3-10、11に示す。ピッチ・パターンではHMLやMHLのように下降するものが11例もあり、全体の64%を占めている。

表3-8 3音節語のピッチと時間長

3音節語	ピッチ(Hz)			ピッチ型
	第1音節	第2音節	第3音節	
acheta	190	158	112	HML
reveni	203	190	110	HML
Pascalet	130	118	103	HML
vilage	171	131	97	HML
caraco	180	147	93	HML
carrega	198	169	104	HML
manaja	148	132	115	HML
galeja	187	167	108	HML
galagu	157	186	118	MHL
s'amuse2	167	194	114	MHL
nouta2ri	122	235	116	MHL

「文献学的アクセント」を考える  
—プロヴァンス語の音響分析を通して—

banaru	132	117	153	MLH
davale2	149	128	155	MLH
achete2	148	170	213	LMH
alume	157	174	216	LMH
sacocho	129	176	222	LMH
amusa	118	130	156	LMH

3音節語	時間長(ms)		
	第1音節	第2音節	第3音節
acheta	147	186	280
reveni	257	150	317
Pascalet	222	171	251
vilage	243	330	408
caraco	144	408	167
carrega	162	185	427
maneja	285	241	538
galeja	221	160	420
galagu	157	143	278
s'amuse2	275	168	346
nouta2ri	337	378	197
banaru	139	210	398
davale2	158	198	436
achete2	83	183	222
alume	174	327	231
sacocho	227	242	366
amusa	120	211	422

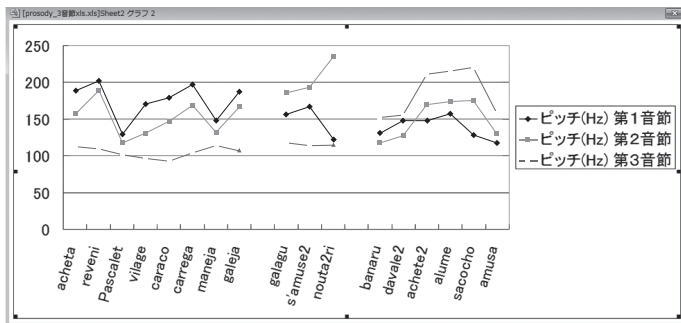


図3-10 3音節語のピッチ

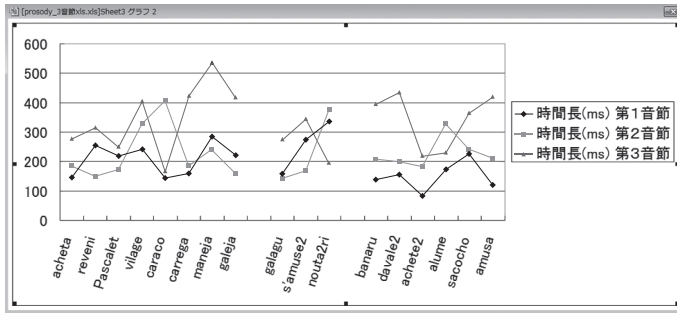


図3-11 3音節語の時間長

### 3.2.3 弱化母音

パリ方言をベースとする現代フランス語では、音声学的特徴として母音や子音がたがいに隣接音の影響を受けにくいことが知られている<sup>12</sup>。このため母音では、英語などで頻発する重母音化がほとんど見られず、弱化母音に関しても極端なシュワー化は見られない。ちなみに、城生佰太郎(1992)ではこのように言語ごとに見られる顕著な傾向性を捉えて、言語の「指向性変化」と呼んで注目している。

本稿で分析したプロヴァンス語も、起源的にはパリ方言をベースとする現代フランス語と同じ源にさかのぼるところから、このようないわば言語の根幹的部分に関わる「ことばのDNA」的部分では共通性があるはずである。

さて、本稿で分析した43語のうち、文献学的アクセントをになっている「強音節」は43であり、いっぽうアクセントをになっていない「弱音節」は68であった。無論、弱音節の物理的強度は強音節に比べるとやや劣ってはいるが、特筆すべきは、だからといって音質までも大きく変わ

<sup>12</sup> 城生佰太郎(1988:41-43)では、「音芯論的張り母音」と呼んでいる。



るということが極端に少ないという点である。これは、ちょうど現代フランス語パリ方言のParis [pa'ʁi] などに見られる第1音節の弱母音と似ている。

それでも、68種の弱音節のうちわずか0.04%に留まるものの、3例に中舌化するほど顕著な弱化母音が見られた。具体的に指摘すれば、

chato [ʰt̪sɑːltə]  
caraco [ʔkjaʰʁɑːʝkə]  
sacocho [ʝsaʰkoːlt̪sə]

である。しかも、これらはいずれも正書法の情報から弱化母音であることを見極められる。すなわち、次末音節がアクセントをになっている語の語末に置かれた< o >がそれである。ただし、音質はそれほど曖昧化せず比較的明瞭に調音されている点が、英語などの弱化母音とは大きく異なる。現代のパリ方言では、petit [pə'ti] などに見られる弱化母音[ə] がほぼこのレベルに相当する。

ところで、わが国ではアクセントの類型論的分類に関して、金田一春彦(1965)が先鞭をつけている。この考えに従えば、強さアクセントを高さアクセントから分ける重要な根拠のひとつに「弱化母音」の存在が挙げられる。すなわち、英語、ドイツ語、ロシア語、モンゴル語などのように弱化母音があれば「強さアクセント」であり、日本語や中国語、タイ語、ベトナム語などのように顕著な弱化母音がなければ「高さアクセント」に属すとみなす。

この点で、プロヴァンス語には上に指摘したように弱化母音が実在する。従って、アクセント類型では「強さアクセント」と分類して良いということになる。ただし、繰り返しになるが、本稿でも何度か指摘したように弱化の度合いが極めて希薄であるという点と、弱化を生じるのが

正書法レベルにおける語末の<o> 1 種に限定されるという点は、将来におけるさらなる検討を要するものと考えている<sup>13</sup>。

さらに、音響音声学的方法では、intensityを計測することによってもある程度は言語音の強度を知る手掛かりが得られるので、以下に示す表3-9に計測結果の一部を、他の曖昧化する程には至っていない弱化母音のデータとともに比較しておく。

表3-9 intensityの比較(単位: dB)

	第1音節	第2音節	第3音節	第4音節
be2sti	81	67.6	--	--
pese	85	63	--	--
po2rri	80	56	--	--
chato	75	66	--	--
caraco	77	75	60	--
sacocho	70.8	71.3	68	--
nouta2ri	74	73.6	66	--
vilage	72	73	60	--
secreta2ri	71	67	73	64

上の表から、弱化が起こるのはほぼ60dB付近であることはわかるが、母音の音質まで変えるに至る弱化の要因を物理的強度のintensityだけに求めることは不当であるといえよう。

最後に、パリ方言とは異なる現象がプロヴァンス語には存在するということに触れておく。今回は、録音状況が好ましくなかったために音響分析が実行できなかったが、文献によればこの方言には二重母音と三重母音が存在するという。もっとも、パリ方言も現代語でこそ [bo:] と

<sup>13</sup> 城生佰太郎(2008:133-134)では、比較的弱化母音の希薄なフランス語は同じ「強さアクセント」に属すとしても、かなり「高さアクセント」寄りではないか、としている。

調音しているが、beauという正書法を見れば明らかなように、もともとは三重母音の[beau]として調音されていた。従って、この方言がパリ方言よりも音韻史的に古い段階にあると考えれば、納得できる現象であろう。

故に、城生佰太郎(1992)の著者である筆者の言によれば、プロヴァンス語の近未来的予測を立てれば、現在行われている重母音はやがて統合されて単一母音化の方向へと変化するはずである。

#### 4. 結論

##### 4.1 国際音声記号表記

第3節で明らかにした音響音声学的分析結果から、表2-1に示した43語すべてを、以下にIPA表記する。

- |                                    |                                   |
|------------------------------------|-----------------------------------|
| (1) <u>chima</u> [tʃiˈma]          | (14) <u>banaru</u> [baˈnaˈɾy]     |
| (2) <u>juja</u> [dʒyˈdʒa]          | (15) <u>galagu</u> [ɡaˈllaˈɟy]    |
| (3) <u>marcha</u> [maˈɾsa]         | (16) <u>agu</u> [aˈɟy]            |
| (4) <u>degenera</u> [deˈdʒeˈneˈɾa] | (17) <u>menusié</u> [meˈɲyˈziːe]  |
| (5) <u>acheta</u> [aˈtseˈta]       | (18) <u>devé</u> [deˈve]          |
| (6) <u>carrega</u> [kaˈɾeˈdʒa]     | (19) <u>jardinié</u> [ʒaˈɾiˈɲiːe] |
| (7) <u>maneja</u> [maˈneˈdʒa]      | (20) <u>davalè</u> [daˈvaˈlɛ]     |
| (8) <u>amusa</u> [aˈmyˈza]         | (21) <u>s'amusè</u> [saˈmyˈzɛ]    |
| (9) <u>galeja</u> [ɡaˈleˈdʒa]      | (22) <u>achetè</u> [aˈtseˈtɛ]     |
| (10) <u>gemi</u> [dʒeˈmi]          | (23) <u>acrò</u> [aˈkro]          |
| (11) <u>agi</u> [aˈdʒi]            | (24) <u>ecò</u> [eˈko]            |
| (12) <u>gari</u> [ɡaˈɾi]           | (25) <u>Pascalet</u> [pasˈkaˈlɛ]  |
| (13) <u>reveni</u> [reˈveˈɲi]      | (26) <u>muguet</u> [myˈɟe]        |

- |                                 |                                       |
|---------------------------------|---------------------------------------|
| (27) <b>gigot</b> [ʒiˈgoː]      | (36) <b>éli</b> [v 'eːli]             |
| (28) <b>Margot</b> [maʁˈʒoː]    | (37) <b>bèsti</b> [v 'bɛːsɪti]        |
| (29) <b>eros</b> [leˈʁoː]       | (38) <b>tóuti</b> [v 'tuːti]          |
| (30) <b>chato</b> [ʔˈʦaːtə]     | (39) <b>pòrri</b> [v 'pɔːʁi]          |
| (31) <b>caraco</b> [ʔkjaˈʁaːkə] | (40) <b>pròchi</b> [ʔ 'prɔːʃi]        |
| (32) <b>sacoch</b> [ʒaˈkoːʃə]   | (41) <b>noutàri</b> [ʔnuˈtaːʁi]       |
| (33) <b>pese</b> [v 'peːze]     | (42) <b>gàbi</b> [ʔ 'ɡaːbi]           |
| (34) <b>alume</b> [ʔaˈlyːme]    | (43) <b>secretàri</b> [ʔseˈkʁeˈtaːʁi] |
| (35) <b>village</b> [ʔviˈlaːʒe] |                                       |

## 4.2 文献学的アクセントの正体

以上の IPA 表記によって、次の4点が明らかになった。

- (1) 文献学的アクセントに主張されている「最終音節における母音」は、音声学的にはすべて時間長が延伸しているという点で一致した。このことは、通時的に最終音節に存在していた子音が消失し、その痕跡として開音節語末母音の延伸が具現化した可能性を強くうかがわせる<sup>14</sup>。

- (2) 文字素レベルで弁別されている < é > と < à > は、単に長音化を示すための記号であり、音質には影響しない。いっぽう、< è > は明瞭に [ɛ] を示しており、時間長ではなく音質差を示すための役割をになっていたことがわかる。

また、< o > も次末音節にある < ò > , < o > ならば [ɔ] となり、語末にある < ò > , < o + 子音字 > ならば [o]、語末に

<sup>14</sup> 代償長音化(compensatory lengthening)として知られる。

ある< o >ならば曖昧化した [ə] となるところから、アクセント記号が単に音の量的側面だけではなく質的側面をもになる場合があることがわかる。

- (3) 以上の研究成果から、アクセント記号をはじめとして文献に記録されている記号類は、いったん音声学の観点からきちんと整理してから分析にかからないと、とんでもない見当違いをしてしまう危険性が大きいということを、今更ながらのように具体例によって指摘したことが、本研究における第1の成果である。

繰り返し強調しておけば、「文献学的アクセント」・「音韻論的アクセント」・「音声学のアクセント」の3者を明瞭に区別することが研究の大前提になるということである。

- (4) もうひとつの成果は、(2)で指摘したようにプロソディーを表記するために用いられてきた記号が、必ずしも音の量的変化を示すだけではなく、時として音の質的差異を表すのにも利用されてきたという事実を確認したことである。このことは、現在ほとんど疑われることなく行われている「分節音」と「プロソディー」という2分法の構図に対し、新たな問いかけを要することになる。すなわち、分節音とプロソディーとの連続性という問題である。

古くは、Firth(1948)のProsody論にも類似の主張が読み取れるが、音声を扱う際の便法として設けられている「分節音」と「プロソディー」という2大カテゴリーを、絶対視することは危険であることを改めて主張しておく。

【参考文献】

- 金田一春彦(1965)「高さのアクセントはアクセントにあらず」、『言語研究』第48号、日本言語学会
- 城生佰太郎(1988)『新装増訂版・音声学』、サン・エデュケーショナル
- 城生佰太郎(1997)『実験音声学研究』、勉誠社
- 城生佰太郎(1992)『ことばの未来学』講談社現代新書
- 城生佰太郎(2008)『一般音声学講義』、勉誠出版
- 杉 富士雄(1960)『南仏叙情詩人テオドール・オーバネル』、大修館書店
- Coustenoble, Hélène. N. (1945) *La Phonétique du Provençal moderne, en Terre d'Arles*. Hertford, Stephen Austin.
- Dourguin, C. et Mauron, Ch. (1952) *Lou prouvençau à l'escolo*.  
L'association pédagogique «*Lou prouvençau à l'escolo*»
- Firth, J. R. (1948) "Sound and prosodies", *Transactions of the Philological Society*, : 127-152.

【ディスコグラフィー】

- Dourguin (1964) *Lou prouvençau à l'Escolo : initiation à la lecture du provençal*. par Marie-Thérèse Aymès et Louis Féraud.